

# 井茂圭洞団長以下4名

## 中国書法家協会の招きで訪中

### 北京・雲南・上海へ

#### 副団長 清水透石

予て中国書法家協会より招聘を受けていた全日本書道連盟代表一行4名「井茂圭洞団長・清水透石・樽本樹郎・谷村篤堂」は、去る四月六日から表記の中国各地を歴訪し、中国書法家協会新役員との会合、各地の中国書協役員との懇親会・饗龍顔・饗寶子碑など史跡の見学などを終え十日、所期の目的を達成し、全員無事帰国した。

歴訪各地見聞録を略述する

4月6日 (木) 成田→北京

9時、連盟事務局飯田氏の見送りを受けて成田より北京へと飛び立った。途中風向きと気流の乱れなどで予定時間より30分ほどの延着であったが、無事北京空港に着き、中国書法家協会外連部主任蔡祥麟氏他数人の出迎えを受け、大きな花束を一人ひとり受けて、バスで新築間もないホテル「北京麗亭酒店」に着いた。【写真①】小休止の後、趙長青中書協常駐副主席・陳洪武副秘書長・蔡祥麟・王大江・外連部王永水女史と

顔合わせ会合が早速もたれた。趙長青氏・井茂団長の挨拶の後、約一時間活発な意見交換が成された。続いて会場を隣の「利苑酒家」に移して午後6時から9時まで中書協による歓迎の宴が盛大に催された。限りの料理の数々、作詩も得意との蔡祥麟先生が李白の詩「將進酒」君不見黄河之水天上来 奔流到海不復回……この美酒で遠来の友よ万古の愁いを吹っ飛ばそうと「長い詩を朗々と吟詠、谷村先生の中国語による歌の披露など、楽しくも有意義な酒宴が3時間にも及び尽きる事を知らぬ程であったが、翌日の出発が早いこともあって九時過ぎお開きとして宿舎に戻った。【写真②】

4月7日 (金) 北京→昆明→陸良

6時50分「北京麗亭酒店」ホテルを出発、北京空港から中国東方航空B737にて8時30分機上の人となる。12時雲南省々都昆明空港に着陸、成田→北京間よりも長時間

### 当連盟訪中代表団

(2006年度)

- 団長 井茂 圭洞 (当連盟副理事長)
- 副団長 清水 透石 (当連盟副理事長)
- 団員 樽本 樹郎 (当連盟常務理事)
- 団員 谷村 篤堂 (当連盟理事)
- 通訳池 玉東 NPO法人 日中交流振興協会 理事長

の旅であった。空港には、平成12年沈鵬先生一行として来日された雲南省書法家協会首席郭偉先生他数名の出迎えを受けた。形式ばらない、如何にも南国的な出迎えで心和むものであった。

昆明は常春の国とか、海拔1,891メートルの高原都市「春城」と呼ばれる。緯度は桂林と同じとの事、日本では沖縄よりやや南(南大東島付近)。ベトナム・ラオス・ミャンマーと国境を接している。今は乾季で一日の温度差は大きく、この日は24℃-10℃とのことであった。北京とは全く天候が異なり、空は青く澄んでいて、世界花博が開かれた都市だけに街は色とりどりの花で溢れ、人々も明るく感じられた。

昼食は昆明中玉酒店、昆明周辺で盛んに栽培されている野菜中心の料理と青島ビールであった。

1時30分第一の見学地「石林」に向つ。赤土の原野の到る所に大小様々な形の石が

によき・によき林立している。ガイドの説明によると、「嘗てここは海の底で動植物の石灰質が堆積していた。それが太平洋プレートに押しされて隆起し、四川省の火山の噴火により火山灰で覆い尽くされていたために今日の姿をとどめている。総て石灰岩であり、ここは地震地帯である」とのことであった。【写真③】

車窓からは麦畑・桑畑・田植えを待つ田んぼなどで、視界に入るところで働いているのは一人二人、鎌を振るっている。牛馬山羊などのんびり草を食んでいる。高速道路ではあるが、コンクリートの継ぎ目ごとにバウンドし、洗濯板のようでも毛をとる事もできない。ミャンマーから移植し、植林したと言うコアラの食べないユウカリの林も目につく。前夜寝不足の諸氏は仮眠しつつ陸良へ向つたが、運転手が15キロも先まで走り過ぎ、引き返すというハプニングもあったが、夕方5時30分宿泊所の陸良向業大酒店に辿り着いた。

6時30分から交流宴が催された。中国側からは、蔡祥麟・郭偉・王業興陸良県文運常務副主席・徐誠忠曲靖市烟草專賣局長(地元の財閥)が出席、陸良県の野菜料理がふんだんにてきた。あまり多く、皿がテーブル上にかさなるくらいであったので、メニューを係の女性に求めたところ十五種類ほどであったが、上手に書かれて読めなかった。四川省に近いのか唐辛子のきいた料理が多かったように感じた。「香椿」と言う野菜が出されたがこれなどまだ日本には入って来ていないような気がする。

マオタイ（茅台）酒が入ると皆多弁となり、日中の書道談義に花が咲き、通訳の池氏も箸をつける暇もないほど凄まじいものであった。どこの地にも酒の強い者とその逆があり郭偉氏と清水は最初からお茶「普洱茶（プーアル）」雲南省「美容と減肥の銘茶・同長は58度マオタイ酒で地元の酒豪と乾杯・樽本先生はビールを中心に、谷村先生はビール少々といったところか。午後9時頃お開きに。各自部屋に戻ったがその後の事は不明。

4月8日 (土) 陸良・曲靖・昆明

いよいよ今回の主たる目的である二爨の碑、見学の目を迎えた。

同業大酒店を8時40分出発、陸良の大通りに面したビルの窓ガラスは全てフルー、そのわけを現地添乗員に聞いたが理由は不明であった。

「爨龍顔碑は劉宋の文帝大明2年（458）9月に立つ。雲南省陸良県の蔡家堡の東南、爨君の墓前に現存している」（書道7巻11号昭和13年）と書かれている。

「爨龍顔碑」は広い通りから狭い路地に入り百メートルほど歩いた所、民家に挟まれるように軒を並べていた。知らないと思過ごしてしまつような所に有った。看板に「全国重点文物保护单位・爨龍顔碑」と横に刻字されたやや貧相な門額が掲げてあった。

午前10時過ぎといつのに碑亭の中は薄暗く、停電のごとで照明もなく、まことに見にくい。正面の鎧戸を全開してようやく碑面の下方が見える程度。持参した拓本と照らし合わせながら矯めつめつ碑面とに

らめつこしてみたが——、流布している解説本には「皇帝が衣冠を着け、正装したように凛々しい姿とか、天下の名剣で玉を刻するが如き鋭さと、豊かな美しさがある」と書かれているが、それは確認できない。谷村先生が最新式のデジタルカメラで撮ったものの方が人間の目よりもはるかによく見える。肉眼では題額も碑陰の三段に分けて書かれた氏名も見えず、いま一つ原碑の素晴らしいさが伝わって来なかった。懐中電灯を持参するなど事前学習の不足によるものかとも思うがちよつと残念であった。「写真④」

表通りの狭い道は土ほこりが立つ所に土曜朝市が開かれ、日用雑貨が並んでいた。苺などおいしい食べものには虻がいつぱいたかつている。荷馬車や安い物の人でごった返し、休日のためか子供も多く、日本の「めんこ」のような遊びに興じていた。

午前11時、爨龍顔碑の見学を終え、陸良から爨寶子碑のある曲靖市に向つた。

郭偉先生の自家用車（現地生産マツタの高級車、御子息の運転で我々4人を運んでくれた。昨日のバスで我等皆身体の方々を痛めつけられていたので大助かりであった。郭偉先生我々の代りにバスで。

明るく広い町並み、爨寶子碑はその繁華街の真中、曲靖第一中学の敷地内にある。

曲靖第一中学は、中国でも屈指の名門、校舎・寄宿舎など広々とした敷地の中にあり、土曜日というのに教室からは授業をしている声が聞こえてくる。大学入試が近いので休日返上して授業しているとのこと、

屋外の大きな掲示板には、数学や化学などの成績優秀者の氏名得点などが貼り出されている。日本では、差別とか人権がどうのとか騒ぎ出すところだが、学力重視、伸び行く中国の力の一面を垣間見る思いであった。

校舎の間をぬって進む「南碑瑣寶」の題額が掲げられた門をくぐるると手前に小さな碑亭があり、中に北宋時代の大理国段氏三十七部会盟碑（1000ころか）があり、その奥、数メートルのところに碑亭の中に爨寶子碑があった。爨龍顔碑よりも管理が行き届いている。明るいガラス戸、中国独特の軒端が大きく反り出した屋根、碑亭に続く道は喬木の新緑や草花が咲き誇り、見るものの心を和ませる。

碑文が「若くて没した当地の振威太守であった爨寶子の記念碑」であるから、書者・刻者とも創意工夫し、精魂込めて書し、刻したものと思いつながら碑文に見入った。井茂团长・樽本先生は、目の位置を変え角度を変えて食い入るように、長時間碑面と睨めつこをしてきた。谷村先生はカメラを碑面に近づけ盛んにシャッターを切っていた。碑面を見ながら、ふっと、「中村不折や梧竹の作品」などが頭に浮んだ。

团长・樽本・谷村先生とも異口同音、実物を見ることの素晴らしさ大切さを二爨の碑の前で語っていた。【写真⑤⑥】

二爨の見学を終え大満足、ホツとして空腹を覚え、曲靖市酒興園で昼食・爨寶子碑の御案内をしてくださった。曲靖市書法家協会副主席兼秘書長「朱從凱先生」に食堂へ

御案内していただいた。野菜の豊富な土地から、炒め物など色々な野菜料理が並んだが、強い地酒「地道雲南」（地道「生粋の」48℃が出され、乾杯でたちまち朱先生朱に染まった。こんな顔で車の運転をするの心配したら、罰則が厳しいので酒気帯び運転はしないと云っていた。

午後2時30分、曲靖から昆明へ。未だ高速度路ができていない部分は細いで「ほこ道」車窓には5・60年前の日本の農家を想わせる脱穀や田起こしの風景が見られ、広い田園の所々には立派な墓石とその周囲を石積みした墓所が点在し（合葬ではなく、一人一人別の所に埋葬している感じ）、道沿いには石灰岩の白い墓石の加工所が目につく。祖先を祭ることを大切にしていることが窺える。

やつと高速度道路に乗って暫く走ると先方でダイナマイトによる爆破工事をするので暫く停車。長距離トラックの運転士はいらら。15・6分してやつと開通。予定時間より大幅遅れで目的地昆明市に辿りつく。

昆明邦克酒店にて雲南省書法家協会との夕食交流宴会が開かれた。雲南省側からは「中共雲南省委組織部人事庁々長段増慶」「雲南省文連首席・周康林」「雲南省文連副主席・段斌」その他雲南省の書関係者が多数出席。今回御招待くださった雲南省書法家協会首席・郭偉先生の人脈の広さと知名度が伺えるものであった。次々に歓迎の挨拶があり、答礼の挨拶の後、乾杯。雲南省の山野の珍珠、蜂の子、竹の中にいる蛆虫から揚げなど次々とテーブルに乗る。雲

南省には「少数民族」がたくさん住んでいる。それらの中に日本人のルートも——と語りは尽きない。長い一日が終わる。

4月9日(日)昆明→上海

午前上海に向う前の時間、昆明市内の見学、雲南民族茶道館にて当地の沢山の種類のお茶を試飲し、減肥・美容茶として知られる「陳年普洱茶(プーアルチャ)」コレステロールと血糖値を下げるという「茹苦茶」をお土産に購入し、正午昆明空港から上海に向う。

上海空港にはかつて書道連盟の招きで来日した中書協の副主席「王偉平先生」と上海書協の方々の出迎えを受け、宿泊所「粵海大酒店」へ、小休止してから上海歓迎宴・中国お別れ宴の会場へ。日本側一同も連日の疲れが出てきたのか、やや盛り上がり欠けた感があったが、全行程を御案内いただいた中書協外連部「蔡祥麟」先生のお別れ宴でのおことは「短く忙しい日程の中で既に何回も来訪されている先生方にも又新たな発見と思いができたこと想います。身内ではありませんが上海書協の皆様にもお世話になりました。お礼申し上げます——」の御挨拶があり、無事最後の宴も終了した。

ここで谷村先生の誕生日が4月6日であることを知り、ホテル内の和食レストラン「吉兆」でささやかながら誕生日パーティーを開きケーキを添えて○○歳の誕生日を祝福した。

4月10日(月)上海→日本  
朝から小雨。团长井茂先生は12時10分閉

西空港へ、樽本先生は13時20分名古屋西空港へというところでホテルから上海国際空港へ。蔡祥麟先生、池さんと共に直行。谷村先生、清水は17時発成田のため上海中内見学、「日本国駐華大使館の職員川崎祐子さん」の案内で書道用品の販売店榮雲軒・上海西冷印社へ(印泥の容器へのつめ方を見学その後、井茂・樽本両先生を空港にお送りした添乗

員のイーストチャイナ池氏と合流。日本の榮宝齋で修行し上海東台路で店を構えている大徳堂「骨董」に行き古い建物(1000年以上経つ)骨董街の一角を見学、午後3時川崎さんとも分れて上海空港へ、出発がやや遅れたが、21時過ぎ無事成田空港に着き帰宅した。

「今回の旅行には準備の段階から事務局の飯田・鹿倉氏、中書協の蔡先生、雲南省の郭偉先生には大変ご迷惑をおかけしました。謹んで御礼を申し上げます。ツアーコンダクター「イーストチャイナ」社長池玉東氏には終始ご高配を賜り、代表団一同心から感謝申し上げます。」



① 北京空港で蔡秘書の出迎え



② 中書協による歓迎の宴 前列中央 趙長青氏、右3は陳洪武氏



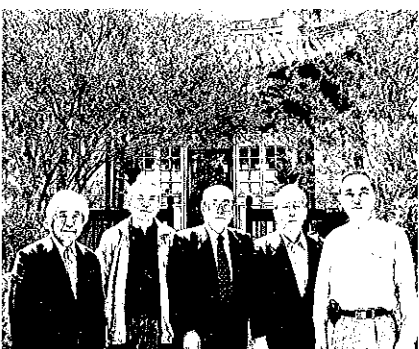
③ 見渡す限りの石林



④ 石林の前で記念写真



⑤ 爨龍顔碑の前で記念写真



⑥ 後方爨實子碑亭 左2は郭偉氏

# 中国書法家の招きで訪中

## 二爨について

団員 谷村雋堂

今回の訪中の詳しい内容は、旅行中も秘書長役で細かな折衝や面倒な記録を下さった清水透石先生が、詳しく報告されるものと思うので、私は派遣して頂いた団員としては無責任ながら、私的な雲南旅行記としてここに記載させて頂くことにする。

\* \* \* \* \*  
四月八日(土)

陸良で雲南の第一夜を過ごす。いよいよ二日目は「大小二爨」碑の見學である。昨晚からホテルに同宿していた郭偉先生たちも、それぞれ自家用車に分乗して八時四十分に出發。

珠江の支流という川を渡り、桑畑や農民が収穫に勵むソラ豆畑を眺めながら、デコボコ道を使いスプリングのマイクロバスで走る。二時間余、あまり大きくはない集落(貞元堡、今は薛官堡というらしい)に入ると、村人に道を尋ねながら露天市場となった細い路地を歩いて行く。道端に無造作に置かれた商品は、食品や衣類、雑貨など様々だが、正直、あまり上等とは言えず、ハエが食品の上を亂舞している。對向して来る口バの牽く荷車をすり抜けた所で車が止まった。

車を降り、小學校の建つ反対側に爨龍顔碑の置かれている斗閣寺がある。今は寺として機能していないらしいが庭は閑静で、その中央に碑亭があり、その中に高さ三三八cm、上幅一三五cm、下幅一四六cmの巨碑が臺座の上に堂々と建っていた。

生憎この日は停電で、中はやや薄暗く、目が馴れるまでは文字の細部は見えにくい。それでも係の人が門をいっばいに開けて、外の光が差し込んでくると、小さく刻られた阮元等の跋もはっきりと確認できる。ただ、碑が高すぎて題額や朱雀・青龍・白虎などの裝飾ははっきり見て取れない。双眼鏡を持つてくるべきだった。

石は恐らく花崗岩か、硬そうな石で平らな面は青黒く艶やかだ。従って年代の割に碑面に大きな剥落や傷はなく、保存状態は比較的良好で、羅振玉が「精拓は舊拓に勝る」というのも頷ける。

我々は寫真を撮ったり、碑を眺めたり、その特徴とされる多くの異體字を捜し、清水先生が持参された昭和十三年の『書道』に掲載された異體字の精拓印影と見比べながら一五〇年前に思いを馳せた。寫真は碑文中程の下部にあった「仰」の異體字。西川先生は『書道』に、その右中



下の三角形を「補空」といふより巾の第二畫のハネと見たい。」と書かれているので、郭偉先生のご意見をお聞きすると「補轉」との見解。私にはどちらとも見えませんが、やや「補轉」に近く感じられた。

爨龍顔碑の參觀を終えると、我々は直ぐに爨賈子碑のある曲靖市へと向かった。昨口からクッションのよくないマイクロバスに乗り続け、やや食傷氣味の我々を見た中國側の氣遣いで、我々四人は郭偉先生のご息が運轉する中國産マツダの自家用車に乗り換え、近くのインターから高速道路に乗り、三十分あまり快適に車を飛ばす。

市街の入り口で地元の幹部と待ち合わせのこと。運轉の郭くんが耳に挟んだソニー製のワイヤレス電話で連絡をとると、すぐに曲靖市書法家協會副主席兼秘書長・朱從凱先生が中國製韓國ゲンダイの自家用車で現れた。十分ほど遅れたマイクロバスが追いつくと、彼の先導で爨賈子碑のある曲靖第一中學に向かう。その中學が想像していた田舎町の古

びた學校舎とは全く異なり、廣々とした敷地は大學のキャンパスのようだ。我々はその校内に車で乗り入れ、校舎や宿舍、グラウンドの分散する校庭中央に停車した。碑亭へと歩く途中、大きな掲示板には數學や化學などの成績が色々と張り出されている。聞けば、雲南省ではトップ、全國でも一二を争う成績優秀校とのこと。先の陸良のひなびた市場との格差もさることながら、北京や上海から遠く離れた地には、受験戦争に勝ち抜こうと、ここまで立派に設備を整えた學校があることに驚いた。

ところで、私はこの中學が昔の「武侯祠」であると思っていたが、平建友・編著『南碑瑰寶』(雲南大學出版社によると、乾隆四十三年(1776)に南陽旗田で出土した賈子碑は、咸豐二年(1853)に「武侯祠」(今のマツチ工場)に置かれ、續いて「置魁閣」(師大付属小)に移され、1973年に今の一中に移置して亭を建て保護した、と言つ。

さて、爨賈子碑(405)は、碑亭の中以て更に四面をガラスで蔽われ保護されている。高さ一八三cm、幅六八cmと、龍顔碑(458)に比べるとかなり小さいが、石質は同じようだ。ただ兩碑の字體は、五十三年の差でここまで変わるかと思えるほどに異なる。賈子碑のチャップリンのひねり擧げた髭と先の大きく脹らんだ靴のような文字と、龍顔碑の隸意を多分に含みながら楷書の骨格を具えた文字とは、その刻法にも大きな違いが確認できる。龍顔碑は同じ藥研刻りでも、やや鋭角に

鑿が入り、寶子碑は表面に近いほど鑿の角度は浅い。これは碑刻の表現方法の違いであるように思えた。

鑿寶子碑は、拓本で見る限り、その戯けたような字形と筆法を無視した刀刻の筆線が、私のような帖學派系の末端にいる者には馴染み難く、臨書はもとより鑑賞にしてみてもつかみ所が見つかからない。ところが今回、碑石を實見してみると、一概に棄てたものではない。なかなか興趣に富んで情緒豊かな



に見える。

石碑には、碑面に書かれた(或いは轉寫した)文字を忠實に刻入しようとしたものと、石上に文字を表現して見せようと刻したのがあるようだ。前者は拓本に採って鑑賞してもあまり大きな差はないが、後者は、本来表面上の拓本では表現しきれない凹部に秘められた様々な情報が目に入って、はじめて真價を見せるのではないだろうか。

鑿寶子碑は實見すると、浅い鑿研状に刻られたその窪みの凹凸、肌合いが目に入り、寧ろその部分が文字の根幹であり、過剰に跳ね上げている末端のパフォーマンスは、草書の連綿とも違い、寧ろ鳥蟲印の飾りのようなもので、いわば刻者の過剰なサービ

ス精神の現れのように見える。漢銅印の鳥蟲篆も、押印ではわからない鳥の目が封泥に押された状態ではじめて確認できるものもある。

いずれにしても実際に鑿寶子碑を見ると、日本で拓本だけ見ているとは分らないものが見えた。その時看取できた風韻をしっかりと脳裡に焼き付けて置こうと思った。

最後に「參觀二龔即事二首」を録し記念とする。

\* \* \* \* \*

〔初訪大龔〕

莫道窮閭刻字荒、楷書隸勢趣深藏。

雲南大龔今初訪、碑石猶浮千古光。

道う莫れ窮閭にして刻字荒れると。楷書、隸勢、趣き深く藏す。

雲南の大龔、今初めて訪つ。碑石猶お浮ぶ千古の光。

〔苦臨小龔〕

修辭駢散古風盈、文字隸眞奇趣横。

刀筆渾然留妙跡、臨模小龔奈難成。

修辭駢散、古風盈つ。文字隸眞、奇趣横たう。

刀筆渾然として妙跡を留む。臨模小龔、奈んとも成し難し。